

「赤い鳥」と宮崎県

―作者・作品と指導者を中心に―

米良 栄州

I 「赤い鳥」の意義と宮崎県への影響

鈴木三重吉主宰の児童雑誌「赤い鳥」は、第一次世界大戦も終結に近づいた一九一八年（大正七年）七月、多くの文壇人の協力を得て編集・創刊された。そのモットーは明治期の説話のお伽噺から文学性の高い童話への質的向上を図ったものであった。目指すところは「子どもにふさわしい話材」と「平易で上品な文章表現」それに「綴方指導」にあった。三重吉は、童話や綴方のみならず、音楽、童画、自由詩にも強い関心を示し、総合的な児童文化運動にまで高めていったことは、赤い鳥運動の大きな特色となった。殊に、綴方指導に熱心な教師にとっては、指導の結果を知る基準にもなるものにも大きな励ましを得たものと考えられる。

当時の宮崎県は、中央の文化圏から遠く隔たった田舎であった。しかしそこにも「赤い鳥」に強い関心を持つ保護者や教師、子ども達がいた。

「賛助読者名簿」「賛助者名簿」「赤い鳥の会会員」等に見られる個人名は、六四名に上る。その中で、「杉田秀夫」の名前が見える。（大二三・一二、第三巻、第六号）現代抽象画で有名な「瑛九」ではないかと考えられる。綴方選外佳作に「野田敏夫」の名前が見え、「瑛九」の従弟と同名同名であることを考え合わせると、可能性が高いと思われる。

「宮崎県西諸郡大久保小学校児童文庫」（昭二・七、第一九巻第一号）や「宮崎県北設楽郡高崎小学校」（大一一五 第一六巻第三号）などは、学校ぐるみで「赤い鳥」を購読していたと考えられる。

さらに「油津町日曜コードモ會」（大八・三、第二巻第三号）の記述があり、地域における読書会を想像させる。

このような学校や地域を含めた団体名を、合わせて五つ見ることが出来る。

また「赤い鳥」を積極的に教育の場に活用していた教師も数多くいたことが分かる。児童作品提出学校の教師たちをはじめ、積極的に活用した表れを次のような通信欄に見ることが出来る。

『児童たちには雨の日には「赤い鳥」の童話を、作文の時には入選の綴方を、読み聞かせ、或は直接に讀ませて奨励致居候』（井上呉水・宮崎縣佐土原小学校）

綴方教育に関心を持つ教師にとって、「赤い鳥」は格好の教材であり、大いに利用されたものと考えられる。

II 掲載作品

「赤い鳥」に掲載された宮崎県関係の作品名・氏名及び選外佳作作者名は次のとおりである。

一 綴方

(一) 入選

① 「せみ」 中埜 棕

宮崎縣児湯郡美々津小学校尋三（大九・一〇第五卷第四号）

② (佳作) 「たこあげ」 安田いまの

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋五（昭六・五 第一卷第五号）

③ (佳作) 「がにとり」 黒木 進

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋六（昭六・八 第二卷第二号）

④ (佳作) 「牛の子」 松井シズエ

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋六（昭六・一〇第二卷第四号）

⑤ (佳作) 「ながれ舟」 朝倉コトリ

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四（昭七・四 第三卷第四号）

(二) 選外佳作

① 「僕」 野田 敏夫 大八・三 第二卷第三号

② 「ゆめ」 河野 和夫 大九・一 第四卷第一号

③ 題なし 園田 米藏 昭六・二 第一卷第二号

④ 題なし 園田 米藏 昭六・四 第一卷第四号

⑤ 題なし 黒木 進 昭六・四 第一卷第四号

⑥ 題なし 福岡 ナミ 昭一〇・一 第九卷第一号

⑦ 題なし 北山 さよ 昭一〇・一 第九卷第一号

⑧ 題なし 中 雄吉 昭八・九 第六卷第三号

⑨ 題なし 西谷ミヤ子 昭七・四 第三卷第四号

⑩ 題なし 小川ヒロエ 昭七・四 第三卷第四号

⑪ 題なし 朝倉ミドリ 昭七・四 第三卷第四号

⑫ 題なし 大倉 伸之 昭一〇・五 第六卷第五号

二 児童自由詩

(一) 作品掲載

① (推奨) 「あの人」 高森 通夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋五（昭三・三 第二〇卷第三号）

② 「魚賣り」 高森 通夫

宮崎縣立病院前谷口方（二三歳）（昭三・五 第二〇卷第五号）

③ (佳作) 「夏の思い出」 高森 通夫

宮崎縣立病院前谷口方（二三歳）（昭三・九 第二二卷第三号）

④ (佳作) 「しずかな夜」 金丸 實

宮崎縣東臼杵郡草川小学校 尋四（昭六・四 第一卷第四号）

⑤ 「たこあげ」 高森 通夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋六（昭六・四 第一卷第四号）

⑥ 「かなしいとき」 高森 通夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋六（昭六・四 第一卷第四号）

⑦ 「雨あがり」 奈須 吉夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋六（昭六・四 第一卷第四号）

⑧ (特選) 「午後」 高森 通夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋六（昭六・六 第一卷第六号）

⑨ (佳作) 「晝の月」 高森 通夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋六（昭六・六 第一卷第六号）

⑩ (特選) 「雨あがり」 高森 通夫

宮崎縣東臼杵郡東郷小学校 尋六（昭六・八 第二卷第二号）

⑪ (佳作) 「雨の朝」 高森 通夫

宮崎縣宮崎中學校 一學年（昭六・一一第二卷第五号）

⑫ (佳作) 「日向」 高森 通夫

宮崎縣宮崎中學校 一學年（昭七・三 第三卷第三号）

⑬「みかん」 高森 通夫

宮崎縣宮崎中學校二學年（昭八・一 第五卷第一号）

⑭「成績發表のあつた日」 高森 通夫

宮崎縣宮崎中學校二學年（昭八・二 第五卷第二号）

⑮「つばき」 高見 茂夫

宮崎縣青呂^{マヤ}小学校尋一（昭八・七 第六卷第一号）

⑯「がらがらぐさ」 吉井 己義

宮城^{マヤ}縣土々呂^{マヤ}小学校尋二（昭八・八 第六卷第二号）

⑰「ダイク」 戸松 愛明

宮城^{マヤ}縣土々呂^{マヤ}小学校尋一（昭八・八 第六卷第二号）

⑱「なのはな」 高橋 忠男

宮城^{マヤ}縣土々呂^{マヤ}小学校尋二（昭八・八 第六卷第二号）

⑲「古馬車」 高森 通夫

宮崎市上野町二丁目中尾方（昭八・一〇第六卷第四号）

⑳「佳作」「ぐみ」 濱田ヨシエ

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋五（昭八・一〇第六卷第四号）

（二）選外佳作

① 高森 通夫（昭八・七 第六卷第一号）

② 吉永 民男（昭八・七 第六卷第一号）

③ 高橋 忠男（昭八・七 第六卷第一号）

④ 永井靖一郎（昭八・八 第六卷第二号）

⑤ 高見 裕（昭八・八 第六卷第二号）

三 自由画

（一）作品掲載分

①（推奨）「人物素描」 高森 路夫

宮崎市縣立病院東門通（一五歳）昭四・一第三卷第一号

②（推奨）「静物」 高森 路夫

宮崎市縣立病院東門通（一五歳）昭四・二第三卷第二号

③「菊」 高森 淳夫

宮崎市縣立病院東門通 昭四・三第三卷第三号

④（特選）「人物デッサン」 高森 淳夫

宮崎市縣立病院東門通 昭六・一第一卷第一号

⑤（特選）「国旗と奉安殿」 金丸 道雄

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭六・五第一卷第五号

⑥「子守り」 田中 義男

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭六・九第二卷第二号

⑦（入選）「えぞぎく」 柳田 君子

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・一第三卷第一号

⑧（特選）「えぞ菊」 西谷ミヤ子

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・一第三卷第一号

⑨「庭のそてつ」 西谷ミヤ子

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・四第三卷第四号

⑩（入選）「みかんの木」 高橋トモヨ

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・六 第三卷第六号

⑪（特選）「みかんの木」 黒木サカエ

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・六 第三卷第六号

⑫（入選）「裏山」 倉田キクエ

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・六 第三卷第六号

⑬「大きな木」 高月 茂

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・一〇第四卷第四号

⑭（特選次席）「緑の木」 高月 春子

宮崎縣東臼杵郡草川小学校尋四 昭七・一〇第四卷第四号

*⑤から⑭の作者は全て草川小学校四年生である。

四 自作童話・童詩

(一) 少年自作童謡

① 「鳥」

鎌田 正直

宮崎縣中郷村梅北尋常高等小学校 大八・四第二卷第三号

② 「ひよ鳥さん」

黒田大丈夫

宮崎縣北郷郡梅北尋常高等小学校 大八・八第三卷第二号

(二) (成人) 童詩童謡

① 「雨」

押領司篤政

大九・一二第五卷第六号

*選外佳作

①

大野 宗雄

昭三・一〇 第二卷第五号

②

木村 壽

昭六・六 第一卷第六号

五 その他

◎本號カット

「男の子」

高森 通夫

宮崎中學校二年 昭八・四第五卷第四号

III 学校における綴方教育と作者・作品

作品掲載者を見ると、東臼杵郡草川小学校、東郷小学校、土々呂小学校からの投稿が多いことに気付く。当時、当該学校に指導者がいたことが想像できる。ただし、東郷小学校分については、殆ど「高森通夫」名である。

一 草川小学校の場合

草川小学校関係の作品掲載数は、綴方四編、自由詩二編、自由畫十編の計一六編に上る。学校教育の中で意図的な取り組みがなされていたものと思われる。中心になって熱心に取り組んだ教師は、平田宗俊氏であった。

(一) 平田宗俊氏の指導

作品を投稿した安田いまの、黒木進、松井シズエを担任したのは平田宗俊氏である。氏はもともと地理、歴史が好きであったが、五年生のとき県下中等学校弁論大会があり、これに優勝したことがきっかけで文を綴ることに興味を持った。さらに、師範学校三年の時に書いた遠足の紀行文を先生からほめられ、とてもうれしく思ったことや、文を綴ることの大切さを感じたことなどが原因となって、教生時代以後、綴方指導に力を入れるようになった。

このように文を綴ることへの関心は、まず自分自身の体験から発している。殊に子どもを理解する上でとても役立つことから、綴方のみならず、生活指導の重要性を踏まえて教育実践を行うことを目標としてきた。文を綴る以前に、日常生活において「心を肥やすこと」「感覚を磨くこと」「心を働かせること」が大切であり、それらの表出が綴方である、との考え方に立って指導をしてきたという。

綴方の時間は週一時間であったが、それ以外に毎日の日記、当番日記、飼育日記、掃除当番日記等を付けさせ、書く機会を増やしていた。取材指導の方法として、学校内や近くの海岸などを一回りした後、見聞した中から題材を選び、書かせ

ることであつた。記述にあたつては、「書こうとするものを鋭く、細かに見て、ありのままに素直に書きなさい。」と指導を受けたそうである。(米良いまの氏談 鈴木三重吉の言葉に通じるものがあり、興味深い。)

書かれた作文にはひとつひとつ丁寧に目を通し、添削をして返した。一クラス五十人以上もの児童がいた当時、忙しい中で全部の作文に目を通すことは大変であつたに違いない。しかしその作業を抜きにしては綴方指導はできない。熱意と根気が、児童の作文力を伸ばす原動力であつた。

添削後は全体について概評を述べた後に、子どもの作品や「赤い鳥」に掲載された作品を例にして、それまでの物の見方や表現を打ち破るための指導をしたという。いわゆる概念砕きであり、新しい物の見方・考え方、あるいは表現の仕方に目を向ける指導がなされたのである。また綴方に意欲を持たせるために、発表の機会を作つた。そのひとつが学校文集「草川文苑」である。各学級から作品を持ち寄り文集を作成した。「赤い鳥」への投稿も、意欲を喚起する手段の一つであつた。発表することにより自信が付き、綴方の力も付いていくことを実践において示したのである。

一方教師自身の指導力を高めるために、子どもの作品を持ち寄り、定期的に合評会を開いた。当時、綴方教育において第一人者であつた木村壽氏を指導者として、研修を重ねた。平田氏は他の学校に転勤してからも木村氏らと交流を重ねながら綴方の指導を継続していった。氏の実践は、生活を重視する指導を基盤とした綴方指導であつたと考えられる。その後自費出版された冊子には「生活綴り方・考」と銘打つてあ

ることからも、生活を見つめることを重視された実践であつたことが分かる。

数多くの自由畫が掲載された尋常四年生の担任は石川茂夫氏であつた。(戸高コトリ氏談) 石川氏は何事にも非常に熱心な先生で、一生懸命畫の指導に取り組んだという。綴り方や描画の指導についての詳細は明らかではない。

(二) 綴方作品について

草川小学校からは、「たこあげ」「がにとり」「牛の子」「ながれ舟」の四編が掲載されている。いずれも身近に起こつたことを題材として、素直に書いていることが特徴である。

三重吉の選評を取り出してみる。

「たこあげ」について……『あれだけの事實にも、子供の生活の或ものが、をどり出てゐて微笑されるではありませんか。』

「がにとり」について……『六年生の黒木君の「がにとり」もくつたくなかない子どもの生活の一斷面が展開されてゐて愉快です。』

「ながれ舟」について……『表出がいかにも素朴で、純真なのがこの上もなく快い。』と述べて、その素直さ、素朴さ、ありのまま性を賞讃している。また對話の重要性にも触れて、次のように述べている。

「たこあげ」について……『安田いまのさんの「たこあげ」も對話が方言的ですが、これもよく味ふとその對話そのものによつて、少しきかない氣のがつちりした弟さんの人物と氣分の動きとが、陰影的に活寫されてゐます。』

「がにとり」について……『……宗四郎、わりはそんがには、どこじ取ったか』や「こりや、そこん、ちつと、ひやがったところがあるどが、そこじ取ったちか。」などの方言的對話は、いずれも實さいに聲の色まで聞えて、その場面の實況が生き浮かんて來ます。』

「牛の子」について……『「おれや、もうしらないぞ。見てはゐられない。」と言つて向うへいかれるところも、短い對話語をとほしておばあさんの氣持や表情までがまざまざと活寫されてゐます。』

「ながれ舟」について……『……かうして見て來ますと、叙寫の上での對話の效果といふものは非常に大きなものであることが感じられるでせう。よくいろいろの事件を對話を一つもまじへないでかいたりする人がありますが、多くの場合、對話なしでは、とかく輪廓的に終り、活現性が稀薄です。……』

指導した平田宗俊氏によると、いつもありのままに書くことを指導していたので、話し言葉のままに書かせたということである。共通語でなく、子供たちが普段話している言葉で書いたことによつて、日常生活がにじみ出た作品になったものと思われる。また、共通語に直すことに注意が注がれ、書くことへの興味も失われたかも知れない。しかしながら話し言葉としての方言は、書き言葉に直したり共通語化すると、かなりの困難を伴う。方言としての情調も失われてしまいがちである。米良（旧姓安田）いまの氏は、「赤い鳥」に掲載された自分の作品を読むように指示されて、読み始めたところ、会話の部分になると男子に笑われたりひやかされたりし

て、とても嫌な思いをしたそうである。

三重吉自身も方言の意味にはかなり苦勞したらしく、次のような注文を出している。

『……なおこの作には方言の分らないのが多くてこまりました。人に聞いてだいぶ註解しておきましたが、とう／＼分らないのもありました。このつぎからは極端な方言へは、受持の先生が附註をしておいて下さるようにおねがひします……』（がにとり）

意味を図りかねて、何回も読み直したのであろうか。なお、他の号の通信欄において、方言による表現について次のように述べている。

『綴方選評、低年級の生徒に對する方言的表出の許容』

「……岡本君のこの作は、低年級の製作だけに殆ど方言的表出で綴つてあります。わかりにくい方言には傍註を入れておきました。小さな人には、はじめから標準語法でかゝせようとしたつて、それは根本的に無理な話ですから、この點を考慮して、かまはず實さいに話すとほりの地方語で、どんどんかゝすことに努めたいものです。さうすれば表出がラクで、イデケずにす／＼かけて、當人も綴方にたいする興味がずつと出て來ます。……」

現在と違つて、共通語に触れる機会としては、教科書が主であつたに違いない當時にあつて、子供たちは方言の方がずつと書きやすかつたに違いない。ただ、三重吉の注文に應じて注釈を加えたり、一部を共通語に直したりしたこともあつたようである。

(三) まとめ

以上、草川小学校の場合について、綴り方を中心に見てきたが、木村壽という先達の指導を受けながら、教師集団が丸となって国語科その他の指導に当たっていたことが伺える。特に平田宗俊という若い実践家が、綴方指導に情熱を傾けていたことが分かった。日常の生活や目の前にあることを、ありのままに素直に書き出していくことから綴り方が始まることを教えてくれる実践である。

二 東郷小学校の場合

(一) 指導の様子

東郷小学校からは「高森通夫」「奈須吉夫」の二人の名前を見ることが出来る。ことに「高森通夫」名の詩は一二編を数え、精力的な取り組みが伺える。この二人を担任したのは、塩月儀市氏である。塩月氏が綴り方教育に興味と関心を抱いたのは小島政一郎氏の影響である。小島氏は、野口雨情の詩に曲をつけ唱歌教材にするなど、子供の活動や創造性を重んじる教育を目指していたという。(青木幹勇著「私の授業」から)

こうした活動に刺激を受けて、童謡や綴り方教育に興味を持ち、「赤い鳥」や「金の星」などの児童向け雑誌を教室において、自由に子供たちに読ませたり読み聞かせを行っていたという。特に読み聞かせは意図的・計画的に実践し、子供の想像力を刺激することに努めた。

綴り方の時間は週一時間であったが、学校や家庭で書いた作品の中から良いものを選んで、「赤い鳥」に投稿していた。

そのことが前述の結果につながったのである。

塩月氏が東郷小学校に勤務している間に、研究指定校の指定を受け、国語の授業を公開したという。東京高等師範附属小学校への内地留学も氏の研究心を高めることにつながったと考えられる。

このように国語教育について豊かな見識と深い洞察力を持って、子供たちの教育に携わった氏の影響力は大きなものがあつたことは想像に難くない。

実践者同士の交流も盛んで、小島政一郎氏、木村壽氏ほか、多くの実践者と交流し合ったという。

その後、塩月氏は宮崎師範学校女子附属小学校主席訓導として、華々しい活躍をされた。

(二) 作者・作品

この項では「高森通夫」に絞って考察をしていきたい。

「高森通夫」は東郷村山陰の商業を営む家に生まれた。さほど体が強いほうではなかったらしく、殊に高学年に至って欠席がちであった。商業を営む家は文化的な配慮もあり、「赤い鳥」や世界童話集などをとってもらっていたという。当時の宮崎県のいわば地方にあつて、恵まれた読書環境にあつたと言える。

塩月氏が担任となつてから、書いた詩を「赤い鳥」に投稿してもらい、掲載されることを楽しみに毎月読んだという。生活の場所である東郷町山陰は、秘境椎葉の入り口に当たり、若山牧水の出身地でもある。山は四季折々にすばらしい彩を見せ、澄んだ川のせせらぎは心に安らぎをもたらす。純朴な

人々の中で、少年は感受性豊かに育ったのではないだろうか。作品の中にもそうした人柄を読み取ることができる。

「あの人」(推奨)

昭三・三・第二〇巻第三号

私はあの人知ってます。

私が入院してる時、

一しょに入院してました。

私は退院したけれど、

まだ／＼入院してました。

あの人、道を通るとき、

赤ちゃんおぶって通ります。

私を見ると笑います。

しずかにやさしく笑ひます。

ほ／＼は赤くてふくらんで、

やさしい顔をしています。

この詩はて八五調のリズムの繰り返しが特徴である。文末の「／＼ます」「／＼ました。」の丁寧な口調は、童謡を意識したものである。非常に優しい少年を想像することができる。この詩について白秋は

「・・・一篇の小品にもなる内容がある。それらをすらくと苦もなく歌いあげてゐる。」と誉めて「推奨」を与えている。

「午後」(特選)

昭六・六・第一巻第六号

学校からかへって、

ごはんをたべて出たよ。

かち栗をかじって、おうかんに出たよ。

弟をつれて墓に行かうと思つて。

おうかんは白い、ずうつと白い。

午後、

向うで友だちが石ゆみ引いてゐる。

こちらむいて笑つた。

どこかで祭りの太鼓がきこえる。

馬の子もねたのか音がしない。

今夜はなんでも静かに伸びてゐる。

土曜日でもあったのだろうか。午後の太陽に照らされて、砂利道が白く光っていたのであろう。普段は気にも留めない平凡な出来事が、こうして切り取られてみると何がしかの意味を持つてくる様である。ただこの詩の中で、後半の部分は全般の時間設定とそぐわないように感じられる。最後の締めくくりである「今夜はなんでも静かに延びてゐる。」とは具体的に何を想像したものだろうか。静かな夜のとばりの中で、草木が音も無く成長していることなどをさしているのだろうか。

この詩について白秋は次のように選評している。

「・・・学校から歸つたあとの生活の一端がよく示されてあります。こんなことは誰も経験することで氣にもとめないである。御飯をたべてから、かち栗をかじって往還へ出る。弟を連れて墓へ行かうと思つて出る。白いずうつと白い往

還が見える。向うで友だちが石弓を引いてゐる。これだけです、なかなか印象がはっきりしています。少年の世界がよく見えませう。」と述べて、少年らしい世界のとらえ方に賞を与えている。

「雨あがり」(特選)

昭六・八・第二卷第二号

雨あがり、しつとりと、
みなふくれてる感じた。
なにもかも紫いろだ。

風がなく木々はみなしづかだ。

ぼとりと一直線に、

びわの葉がおちた。

夕暮の日。

「雨あがり」は中学校一年生の時の作品である。東郷小学校を卒業した彼は、塩月先生の熱心な指導の甲斐あって、宮崎中学校に入学した。そして中学校二年生まで「赤い鳥」への投稿を続けるのである。綴り方指導の成果が表れていると考えられる。

作品においては、雨が上がった後、山も畑も草も木もいっぱいに水を含んで膨れているようだ、というのである。さらにまた、今まで騒々しく降っていた雨がやんで、世界が一瞬間音を消した。静けさに包まれたその中で、びわだけが葉を落とし、そのかすかな音が作者の耳に届いたのである。かすかな自然の営みに、敏感に反応する感受性を持っていることが分かる。

白秋もそのことに触れて、次に様に選評している。

『高森君の「雨上がり」には、雨上がりのふくれてゐる感じ、紫色、さうした清新さの中にその感覚を磨いて鋭く鋭く張りつめて行つてゐます。ぼとりと一直線に枇杷の葉がおちた。その一直線が際立つてゐます。』

こうした感覚の「鋭さ」は、自身の健康から来るものや、読書の影響から来るものが複合して、身につけてきたものではないだろうか。

次は「夏の思い出」という詩である。

「夏の思い出」

(昭三・九 第二卷第三号)

白くけむつてゐる、
入日の中で、
繪を描いたよ。

夕方に近い

河原の中だったよ。

夏は躍動の季節である。特に子供たちにとっては、日の長い一日を遊びに夢になつて日暮れまで遊ぶことのできる季節である。日焼けして健康的な子供たちのイメージと姿を思い浮かべることができる。しかしながらこの詩は少し状況が異なっている。白くけむる夕方の河原は、川のせせらぎが聞こえ、その中で絵を描いている作者が居る。絵を描くこと自体が静的であるし、作者の他には人気を感じさせない。こうしたことから、この少年については、一人静かに本を読み、絵を描く孤独な少年を連想させる。

次に、掲載作品に出てくる言葉の頻度を調べると、色や天体、時刻等に顕著な特徴を見出すことができる。

① 色に関して

ア 白（白い、白く、白っぽく）・・・・・・・・七
イ 赤（赤い、赤くなる）・・・・・・・・五
ウ 黒（黒く）・・・・・・・・二
エ その他（紫色、あざぎ色、灰色）・・・・一

② 時刻に関して

ア 夕方（入日、夕ぐれ、夕日、夕方）・・・・八
イ 朝（朝）・・・・・・・・三
ウ 晝（晝）・・・・・・・・二

③ 気象に関して

ア 雨（雨・雨あがり）・・・・・・・・五
イ 風（風）・・・・・・・・二

④ 形容に関して

ア 静か（静かな、静かに）・・・・三

⑤ 言葉の感じから

ア 寂しい感じ（寒い、つめたい、さびしい、少ない、ぼとりと、かなしく、すこし、うすい）・・・・・・・・九
イ 明るく楽しい感じ（仲よく、一しよに、やさしく）・・・・三

色に関してみると、白や赤が多い。黒やその他の色が続くが、全体としては色彩豊かとは言えない。

時刻に関しては夕方が多い。朝や昼に比較して、夕暮れ時は人が繊細な心を取り戻すとき。作者もそうした情景の中で思いにふける機会が多かったのだろうか。

気象に関しては、雨や風が多く使われている。形容に関しても、「静か」が多く使われ、その他の使用語句も、さびしい感じを与えるものが多用されている。明るく楽しい感じの表現も無いわけではないが、その回数は少ない。

こうしてみると、「高森通夫」少年の日常は、自身の健康状態を反映するとともに、友だちとの交流も少ない物静かな日々を過ごしていたように思われる。

次は中学校入学後の作品である。

「みかん」
（昭八・一 第五卷第一号）

はじめて食った、みかん。
つめたい、すっぱいみかん。
はじめて、みかん食ふころ
みなかは、ちようどお祭。
露店に賣ってる、みかん。
つめたい、すっぱいみかん。
はじめて、みかん食った。

宮崎における中学校生活は、作者にどう映ったであろうか。この詩から、新しい土地での中学校生活が生きて感じられる。精神的にも変化が感じられる詩である。

(三) その後

作者「高森通夫」はその後大学において九州の文芸同人雑誌「竜舌欄」に投稿するなど、文学的な志を持ち続けていた。その後、佐藤佐太郎氏に師事して短歌の創作にも力を注いだという。小・中学校時代に培われた綴り方の力が、その後の成長にも大きな影響力を持っていたのではないだろうか。

IV 結び

「赤い鳥」と宮崎県について、草川小学校及び東郷小学校に焦点をあて、作者・作品と指導者についてみてきた。

当時の宮崎県は僻遠の地であり、文化的にも恵まれない状況の中で、先に挙げたような作品が「赤い鳥」に掲載されていた。その陰には綴り方教育に情熱を燃やし、熱心に子どもたちを鍛えた教師群像があったことが分かった。日常の生活を鋭く見つめる中で取材し、作文・推敲の過程を経て作品として仕上げさせる。それを「赤い鳥」に投稿して、さらに綴り方の意欲化を図るという、先を見通した実践者の姿が見えてきた。教師を信じて素直に日常を活写した子どもたちである。明るく、のびのびと毎日生活している姿、あるいは静かに思索する姿等が浮かび上がってくる。

一時代を画した「赤い鳥」運動であるが、ここに抛り所を得、綴り方を要として結ばれた教師と子どもたちが居たことを、確かめることができた。文を綴る経験と、その時培われた能力は、その後の成長に大きな影響力を持って人格形成に貢献したのではないだろうか。

当時の宮崎県の、国語科指導や読書活動等に大きな刺激をもたらした「赤い鳥」の存在を、改めて評価するところである。